The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	行動指標を用いた心理臨床の関係性に関する定量的検討 ： 描画法施行場面を題材として
Author(s)	長岡, 千賀; 佐々木, 玲仁; 小森, 政嗣 他
Citation	対人社会心理学研究. 2013, 13, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

行動指標を用いた心理臨床の関係性に関する定量的検討

―描画法施行場面を題材として―

長岡千賀（京都大学こころの未来研究センター）
佐々木玲仁（九州大学人間環境学研究院）
小森政嗣（大阪電気通信大学情報通信工学部）
金　文子（河南町教育委員会）
石丸綾子（九州大学人間環境学研究院）

本研究では、心理療法の現場で用いられる描画法の 1 つである風景構成法を題材とした。この技法では、セラピストである見守り手の＜教示＞とクラエイントである描き手による＜描画＞の交替が 10 回以上繰り返されて描画が進む。見守り手と描き手との関係性を基盤として、この技法を通して生き生きとした心的イメージが動き、このイメージの賦活が描き手の変化のきっかけになると考えられている。本研究の目的は、見守り手の教示と描き手の描画の交替の繰り返しを通して 2 者の関係性が成立していくプロセスを、描き手の行動を指標として定量的に評価することである。1 名の見守り手によって 17 人の実験参加者（描き手）に対して個別に施行された風景構成法施行場面が撮影された。各事例は見守り手によって臨床心理学的に評価された。また第 3 者としてビデオを見た行動記録者は、各事例における、描き手から見守り手への交替の際の描き手の行動を全てコード化した。行動種類総数や特異性の時系列的変化が求められた。結果から、各事例についての見守り手による臨床心理学的評価と、描き手の行動の間に対応関係があることが示された。

キーワード：心理療法、描画法、行動、話者交替、クライエント-カウンセラー関係

序論

心理療法の場面では、心理的な困難を抱えたクライエントは、セラピストとのやりとりを通して新しい自己認識や他者認識を獲得し、精神的・行動的に本人がより生きていきやすくなるような変化を遂げる。このために心理臨床家は、悩みを持つクライエントの話を聞いたりクラエイントの様子を見たり、あるいは彼らの創作を見たりして、クラエイントの内面を理解し、またクライエント-セラピスト関係性を構築している(e.g., Egan, 2007; Rogers, 1957; Teyber & McClure, 2011)。この臨床家の主観的経験は、これまで、豊かな経験のある多くの臨床家によって定性的に記述されてきたが、そこには客観性や一般性に疑問の余地がある。熟達した臨床家の主観的経験が、客観的に捉えうるクライエントの行動の間にある対応関係を実証的に示すことができれば、その成果は、臨床の実践や教育の場面への応用として役立つばかりでなく、非言語行動に関する理論構築にも大きく貢献する。

本研究で題材とするのは、クライエントの理解や治療を目的として用いられる風景構成法という描画法の施行場面である。この技法は精神科医や深層心理学を背景とする臨床家によって施行されることが多い。絵を描くのはクラエイント(以降、描き手)であるが、セラピスト(以降、見守り手)から教示され見守られるという相互作用の中で描くことによって、1 人のときには描き得ない絵を描くことが可能となり、そのときに、心的イメージが生き生きと動くと言われている(中井, 1996)。このイメージの生き生きした賦活が描き手に治療的に働くため、この技法は治療的な側面を持つとも考えられている(中井, 1996; 皆藤, 1988a, 1996)。

描き手−見守り手の明示的な交替による構造

風景構成法を題材とする理由は、この手法が、描き手と見守り手の明確な交替が繰り返して描画が進行するという一定の構造を持つからである。

風景構成法では、描き手は風景構成法の手順に従って 1 枚の風景画を完成させるように求められる(Figure 1)。描画の手順は、川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石、付加物の素描、彩色の順である。この手順は、この技法がこの技法として最も治療的に機能するように工夫して定められたものである(中井, 1984, 1996; 佐々木, 2012)。

見守り手がある 1 つのアイテムを教示した後、描き手がそのアイテムを描き、それが完了すれば、また見守り手が次のアイテムを教示する、というサイクルで描画が進む。また、遊戯療法や箱庭療法と異なり、クライエントが立ちあがったり歩いたりするなど体を大きく動かすこともほとん

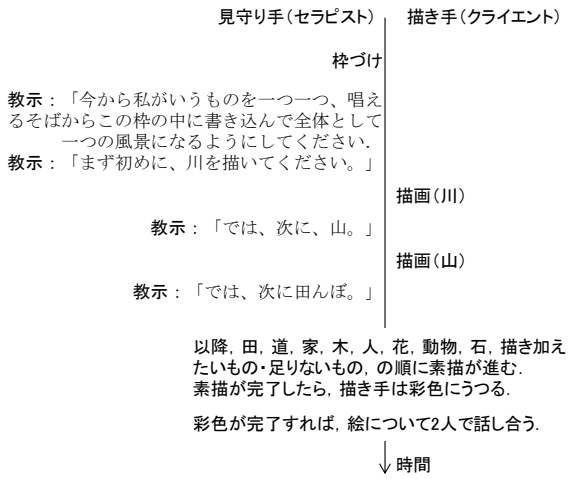

Figure1　風景構成法の手順

どなく、両者ともに着席したまま進む。

描き手の一連の描画の際に、見守り手は、アイテム名を告げる教示の他はほとんど無言で、描き手や絵の方を見ているだけである。見守り手は、稀に、次のアイテムの教示を今していいか否かを尋ねたり、描き手から質問があった場合に簡単に答えたりすることはあるが、それ以外は話さない。描き手が描いた絵や絵を描いたこと自体を明示的に褒めることもない。強い笑顔を見せたり、大きなジェスチャーを見せたりすることもほとんどない。このため、交替の繰り返しというシンプルな構造と捉えることができる。

一方、各アイテムの位置・形状・大きさ・数・色などは描き手の自由に委ねられる。描かれるアイテムや手順は同じであるが、出来上がる絵はどれ一つとして似たものにならず、そのときの描き手の特性や状態、またそのときの見守り手との関係性を反映し、実に多様である。また描画のペースも描き手の自由であり、描画完了までに 10 分ほどしかかからないこともあれば、2 時間半もの長い時間かかった事例もあると報告されている(皆藤, 1988a)。彩色を終えた後、描き手と見守り手は、描かれた絵を眺めながら、その絵について話し合う。

このように構造が定まっており、またシンプルな交替の繰り返しがあることにより、行動の定量化や、描画の進行に伴う行動の変化の視覚化がしやすく、また事例間の比較もしやすいというメリットがある。

描き手−見守り手の心理的なやりとり感：関係性

このように風景構成法は単純な構造を持つが、実は見守り手が、その描き手にとって最適な見守り方ができるようになるまで、セラピストはかなりの経験を積まなければならないと言われている(皆藤, 1988b)。

なぜなら、風景構成法が治療的技法として機能するかどうかは、描き手と見守り手の関係性の成立の程度に依り(皆藤, 1988a, 1996; 河合, 2000)、誰もが容易に関係性を十分に成立させられるわけではないためである。セラピストがその描き手にとって最適な関与をし、関係性が成立したときに、生き生きとしたイメージが賦活し、そのイメージを見守り手が受け取りながら心理臨床的治療に役立てると言われている(皆藤, 1988b, 1996; 河合, 2000; 吉田, 2004)。

では、関係性が十分に成立しているときとは、どのようなときだろうか。どの描き手もほぼ手順どおりに描画を完成させ、上述のとおり、描き手の関与の仕方も非常に控え目であり、一見何もしていないように見えることから、臨床家ではない者が本技法施行場面をビデオで見たとしても、描き手と見守り手の間に関係性がどの程度成立しているか判断するのは非常に難しい。また、セラピスト自身が何を手掛かりに関係性成立の程度を判断すればいいか、セラピスト養成の場で教えられているわけではなく、経験によって体得される。さらに、臨床心理学の分野で従来なされてきた風景構成法研究は、描かれた絵に焦点を置いて分析し、クライエントの描画の特異性を記述する研究がほとんどであった(皆藤, 1996)。そこには、臨床家の主観的解釈が含まれることが多いため、従来の研究から、関係性成立のプロセスに関して客観的に知ることは困難である(佐々木, 2005)。

しかし、関係性成立に関する熟達者の評価が、客観的指標で取り出せるならば、臨床実践や教育に貢献するのはもちろん、非言語行動研究への大きな貢献となる。

本研究の目的と方法

そこで本研究では、臨床経験のある見守り手が成功した風景構成法施行事例を分析対象とし、見守り手の主観的評価と、描き手の行動が対応するかどうかを検討する。特に、描き手から見守り手への交替、すなわち、描き手が 1 つのアイテムを描き終わり、次のアイテム名を告げる見守り手の教示を受けるまでの区間に特に焦点を置き、描き手の行動を分析する。

描き手から見守り手への交替の区間に焦点を置く理由は、この箇所が、言葉のやりとりの対話における話者交替と類似していると捉えることができるためである。対話における話者交替の際に、現在の話者は、視線などを使って、次の話者に発話権を譲るシグナルを送ることが知られている（例えば Duncan, 1972; Kendon, 1967; Duncan & Fiske, 1977)。

風景構成法における交替の際にも、これと類似した、相手に譲ることを表すシグナルが生起しうると考えられる。この部分では、描き手は、次の見守り手の教示を受け入れる準備ができていることを示すシグナルを見守り手に送っている可能性がある。また見守り手はそれを手がかり

として次の教示のタイミングを計ることができると考えられる。これらのことから、描き手から見守り手への交替の区間では、2 者間の関係性を反映した行動が観察される可能性が高いと考えられる。

また、この区間の行動は、見守り手が手がかりとしやすいため、得られた知見を実際の臨床場面に応用できる可能性も高い。

本研究では、この区間において生じる行動の、描画の進行にともなう個人内の変化に焦点を置いて分析する。なぜなら、臨床の現場では、面接の進行に伴うクライエントの外見や話し方の変化もきちんと捉えておくことが大切にされるためである(例えば、福山, 1994)。描き手のこの区間における行動も、描画の進行にともなって変化する可能性がある。さらに、この描き手の行動の変化の仕方が、事例についての見守り手による評価と対応する可能性がある。また、描画の進行とともに、描き手と見守り手の関係性が徐々に成立した場合、描画後の行動に、描画の進行に伴う系統だった変化が見られる可能性がある。これについて検討するため、本研究ではその個人の行動としての特異性を包括的に表す選択情報量を用いる(詳しくは次節で述べる)。

加えて、関係性が成立した事例で観察される行動の特徴を具体的に調べることで、風景構成法における描き手と見守り手の関係性とは如何なるものかについて考究する。

方法

分析事例

18～27歳の大学生・大学院生17名(男2名、女15名)は描き手として個別に調査に参加した。描き手は、1 名の見守り手 (40 歳男性臨床家。7 年間の心理療法施行の経験を有す)とともに入室した後、実際の臨床場面と同じように、見守り手の教示を受けながら風景構成法の手順に従って 1 枚の絵を完成し、その後絵について見守り手と話し合った。描き手と見守り手は初対面であった。また描き手を募集する際に、この描画法実施は、心理療法としての実施ではなく研究の目的で実施されるものであるということについて説明した。実際、描画やその後の話し合いで、描き手が抱える悩みが語られることはなかった。

具体的な描画の手順は次のとおりである。描き手による描画の前に、見守り手は描き手の前で、画用紙の縁にサインペンで線を引き、枠を描いた。見守り手は描き手に、その画用紙とサインペンを手渡し、見守り手が順に教示する 10 個のアイテムを、最終的に 1 つの風景になるように描画するよう教示した(Figure 1)。見守り手はアイテムを 1 つずつ教示し、その都度、描き手はそのアイテムを描き込んだ。描き手は素描にはサインペンを、彩色には 25 色クレヨンを用いた。各アイテムの位置・形状・大きさ・数・色など、および描く速さや時間も、見守り手は指定しなかった。見守り手はアイテムを教示する発話のほかに、稀に、次のアイテムの教示を今していいか否かを尋ねる「いいですか？」という発話、ならびに、描き手から質問があった場合に答える発話をするが、そのほかは無言で描き手の描画を見守った。両者の音声を、事前に了承を得て、録画・録音した。

描画後の描き手と見守り手の話し合いの後、見守り手が別室に移った状態で、描き手は、描画しながらどのようなことを感じたか、見守り手の存在が気になったかどうか、等を問う質問紙に回答した。

見守り手による事例評価

見守り手は、全ての事例が終了した後に、描かれた絵を見ながら各事例を思い出し、描き手と見守り手の関係性の成立とイメージの賦活の程度のそれぞれについて同時に評価した 。描き手と見守り手の関係性とは、言葉のやりとりによる心理療法におけるクライエントとセラピストの関係性(たとえば、Havens, 1986; 氏原, 2002)と同様に、描画法が治療的に働くための前提として最重要視される(河合, 2000)。本研究では 4 段階(1:「成立していない」、2:「やや成立していない」、3:「やや成立した」、4:「成立した」)で評価された。イメージの賦活とは、見守り手のアイテム教示や描画活動をきっかけにして、これから描こうとするものやそれにまつわる様々なイメージが描き手の中に生じることである(河合, 2000; 山中, 1984; 吉田, 2004)。本研究では 4 段階(1:「賦活していない」、2:「やや賦活していない」、3:「やや賦活した」、4:「賦活した」)で評価された。

また、21 年の臨床経験を有する女性臨床家に、無作為抽出された 2 事例のビデオを視聴させ、施行手続きやイメージ賦活についてコメントを求めた。

行動分析手法

行動のコーディング 描き手と見守り手の両者がうつったビデオを見ながら、記録者 6 名(臨床心理学の専門的教育を受けていない大学学部生または大学院生で、事前に見守り手との面識がなく、見守り手の評価を聞かされていなかった)は、描き手から見守り手への交替の区間、すなわち、描き手があるアイテムを描き終えペン先を紙から離したときから、見守り手が次のアイテムを言うまでの区間における、描き手の行動をコード化した。描き手の行動には、「『はい』などと言う」行動も含め、「上体を起こす」、「手を両膝の上に置く」、などである。わずかな動きであってもすべて記録した。記録者はコーディングのトレーニングを受けた上で、3 名ずつの 2 グループに分かれ、独立して、まず本分析事例と同じ方法で収録された 3 事例のコーディングを行った。グループ内では全員一致するコ

ーディングを最終決定とした。2 グループの間でコーディングに高い一致度が得られたため(κ =.96)、測定の信頼性は高いと判断し、本分析事例は 2 グループが独立して凡そ半分ずつをコーディングした。

分析は、最初の 10 個のアイテムである、川から石までの素描に関して行った。これ以降の付加物の素描と彩色はそれ以前と性質が異なると臨床心理学の分野で考えられており(佐々木, 2005)、実際、彩色にはクレヨンを用いるため、それを片づける行動などのために、描き手の行動はほかと著しく異なったためである。

事例内での行動セットの特異性 各アイテムを描画した後の描き手の行動が、描画の進行とともに個人内で変化するか否かを調べる。各アイテム描画後の描き手の行動セット(あるアイテム描画後に生じた複数の非言語行動の組み合わせ)が、その個人のものとしてどの程度特異か(希少か)を包括的に検討するため、本研究では描画後の行動の生起・不生起の確率に基づく選択情報量を行動の特異性の指標とする。

例えば、ある描き手の全 10 アイテムのうち、川の描画後にだけある行動 b_j (j=1,2…,N: N は行動セットに含まれる行動の種類)が生起した場合、その行動に関する確率は、川描画後は 1/10(b_j が生起していたのは 10 アイテム中 1 アイテムの確率)、川以外の山、田、道、・・・の描画後は 9/10 である(b_j が生起していないのは 10 アイテム中 9 アイテムの確率)。そこで、各アイテム描画後にある行動 b_j が生起する場合はその確率を $P(b_j)$とおき、生起しない場合は $P(b_j\sim)$とおく(ただし $P(b_j\sim) = 1 - P(b_j)$)。ここで、i 番目(i=1,2…, 10: 川から石まで)のアイテム描画後の描き手の様子を E_iとすると、i 番目のアイテム描画後に行動 b_j が生起した場合は $P(E_{ij})= P(b_j)$、生起しなかった場合は $P(E_{ij})= P(b_j\sim)$となる。

アイテム i 描画後の行動 b_j に関する特異性 I_{ij} は式(1)で与えられる。I_{ij} は、他ではほとんど生起しない稀な行動が生じたときや、他ではいつも生起する行動が起こらなかったときに高い値となる。

$$I_{ij} = -\log P(E_{ij}) \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots(1)$$

また、選択情報量は加法性があるため、アイテム i の描画後に生起した行動セット全体の特異性は下式で求められる。

$$I_i = -\log(P(E_{i1}) \times P(E_{i2}) \times \ldots \times P(E_{iN})) = \sum_{j=1}^{N} I_{ij} \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots(2)$$

結果

見守り手による事例評価

上述の女性臨床家のコメントから、本分析事例が現実の臨床場面での風景構成法と同じ手順で施行されたことが確認された。

各事例の、描き手と見守り手の関係性の成立とイメージの賦活の程度のそれぞれについての、見守り手による評価を Table 1 に示す。この評価値に基づいて 17 事例を A～F 群に分類した(Table 1)。A 群は、描き手と見守り手の関係性が十分に成立しイメージの生き生きとした賦活が強く見られたと評価されたが、対照的に D 群は、関係性が十分成立せずイメージの生き生きとした賦活が見られなかったと評価された。 B 群は A 群ほどには高い評価ではない群であり、C 群は D 群ほどには評価が低くなかった。

E、 F 群は 2 者間の関係性が成立していないと見守り手によって感じられた点で C、 D 群と類似するが、イメージの賦活の点で C、 D 群と異なった。また A、 B 群とは関係性成立の点で異なった。E 群では見守り手は、描かれている絵からはイメージの動きが感じられなかったが、描画後の話し合いを通して、描き手の中ではイメージが動いていたことに気づいた。一方 F 群では見守り手は、描き進められている絵や描画中の描き手の様子から、描き手の中では確かにイメージが動いていると感じた。

経験のある女性臨床家も、イメージ賦活について本見守り手と異ならない評価をした(B 群と D 群から 1 事例ずつ評価)。このため、本見守り手の評価は臨床心理学的妥当性を有すると判断し、以降の分析では群別に検討を行う。また、本見守り手の報告から、見守り手自身が各事例を評価する際に、各アイテム描画後の描き手の行動の想起を意識していなかったことを確認した。

描き手の行動の種類

17 事例における川から石の 10 アイテムの描画後に、117 種類の行動が観察された(付録)。行動には、「上体を起こす」といった、本研究に参加した描き手のほとんどに毎回のように見られたものから、「両膝に手を置き腕を伸ばして背筋を伸ばす」、「座りなおす」といった他の描き手や他のアイテム後にはほとんど観察されない非常に稀なものまであった。

Figure 2 は行動種類総数を示す。関係性もイメージ賦活も低く評価された D 群のうち、事例 11 では行動種類総数が最も多かった。このことは事例 11 の描き手が最も多くの種類の行動を見せたことを示している。一方、関係性が成立しないままイメージが動いたと評価された E 群では、2 事例ともに、他の群と比べて行動種類総数が顕著に少なかった。関係性もイメージ賦活も最も高く評価された A 群の 4 つの事例では共通して、行動種類総数は 平均的であった。

行動セットの特異性の時系列的変化

行動セットの特異性が時系列的にどのように変化したかを表す情報量の時系列的変化を、Figure 3 に示す。

Table1　分析事例と見守り手による評価

事例番号	描き手	見守り手	見守り手による評価			
			関係性†	賦活度‡	群	コメント
事例 1	女性	40 歳男性臨床家描画法実践経験を有す	4	4	A	見守り手は，描画中や話し合い中に，2 者間の関係性が成立し，イメージの生き生きとした賦活が強く見られたと感じた
事例 2	女性		4	4		
事例 3	女性		4	4		
事例 4	女性		4	4		
事例 5	女性		3	3	B	A 群ほどではないが，見守り手は，描画中や話し合い中に，2 者間の関係性が成立し，イメージの生き生きとした賦活が見られたと感じた
事例 6	女性		3	3		
事例 7	男性		3	3		
事例 8	男性		3	3		
事例 9	女性		2	2	C	D 群ほどではないが，見守り手は，描画中や話し合い中に，2 者間の関係性が十分成立せず，イメージの生き生きとした賦活が見られなかったと感じた
事例 10	女性		2	2		
事例 11	女性		1	1	D	見守り手は，描画中や話し合い中に，2 者間の関係性が十分成立せず，イメージの生き生きとした賦活が見られなかったと感じた
事例 12	女性		1	1		
事例 13	女性		1	1		
事例 14	女性		1	3	E	見守り手は，描画中には 2 者間の関係性が成立したとあまり感じられず，描かれている絵からもイメージの動きが感じられなかったが，描画後の話し合いの際に，実は描き手の中ではイメージが動いていたことが分かった
事例 15	女性		1	3		
事例 16	女性		2	4	F	見守り手は，描画中には 2 者間の関係性が成立したとあまり感じられないが，描かれている絵や描画中の描き手の様子からは，描き手の中では強くイメージが動いているように見えた
事例 17	女性		2	4		

† 1:成立していない，2:やや成立していない，3:やや成立した，4:成立した
‡ 1:賦活していない，2:やや賦活していない，3:やや賦活した，4:賦活した

軸が描き手の行動セットの選択情報量である。情報量の値が連続して 0 である場合は、いつも全く同じ行動セットが観察されたことを示す。逆に値が大きいほど、他とは異なる、言い換えればその個人のものとして特異的な行動セットが観察されたことを示す。

A 群の事例には、川では情報量が高いが、続く山でいったん減少し、その後の田んぼで再びわずかに上昇するものの、それ以降徐々に情報量が低下する傾向がある。このことは、A 群の最初の方のアイテムではその他のときと異なる特異性の高い行動セットが観察されるが、後半のアイテムでは比較的一貫した行動セットが観察されるようになったことを示す。

B 群のうち事例 7、8 では A 群と同じ傾向を示した。事例7、8では山から田、或いは田から道で情報量が激減した。A 群では川から山で情報量が激減したことと比べると、B 群の事例 7、 8 では A 群より遅いタイミングで情報量が減少し始めたとみることができる。

一方 C、 D 群では、A 群や B 群の一部のような、描画の進行に伴う情報量の減少傾向は認められなかった。また C、 D 群のそれぞれの群内で共通する系統だった時系列的変化は認めにくかった。D 群の事例 11 と 13 では、最初から終わりまで、全体的に値が高かった。このことは最初から終わりまで行動セットが一貫しなかったことを示している。また、C 群の事例 9 と D 群の事例 11 において、進行途中で情報量が突発的に上昇する箇所(それぞれ順に、道、家)があった。

E、 F 群内では、ほぼ共通して、他の群と比べ特異性が全体として著しく低く、また比較的、時系列的に一貫していることが示された。すなわち、描画の最初から終わりまで、行動セットがほとんど同じであったことが示された。

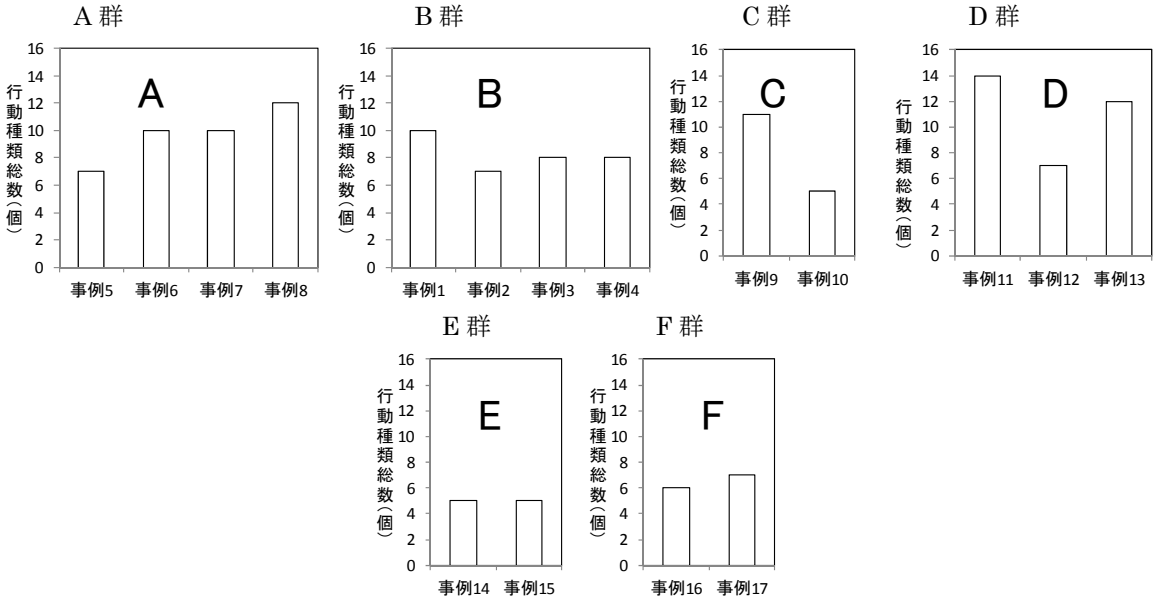

Figure2 行動種類総数

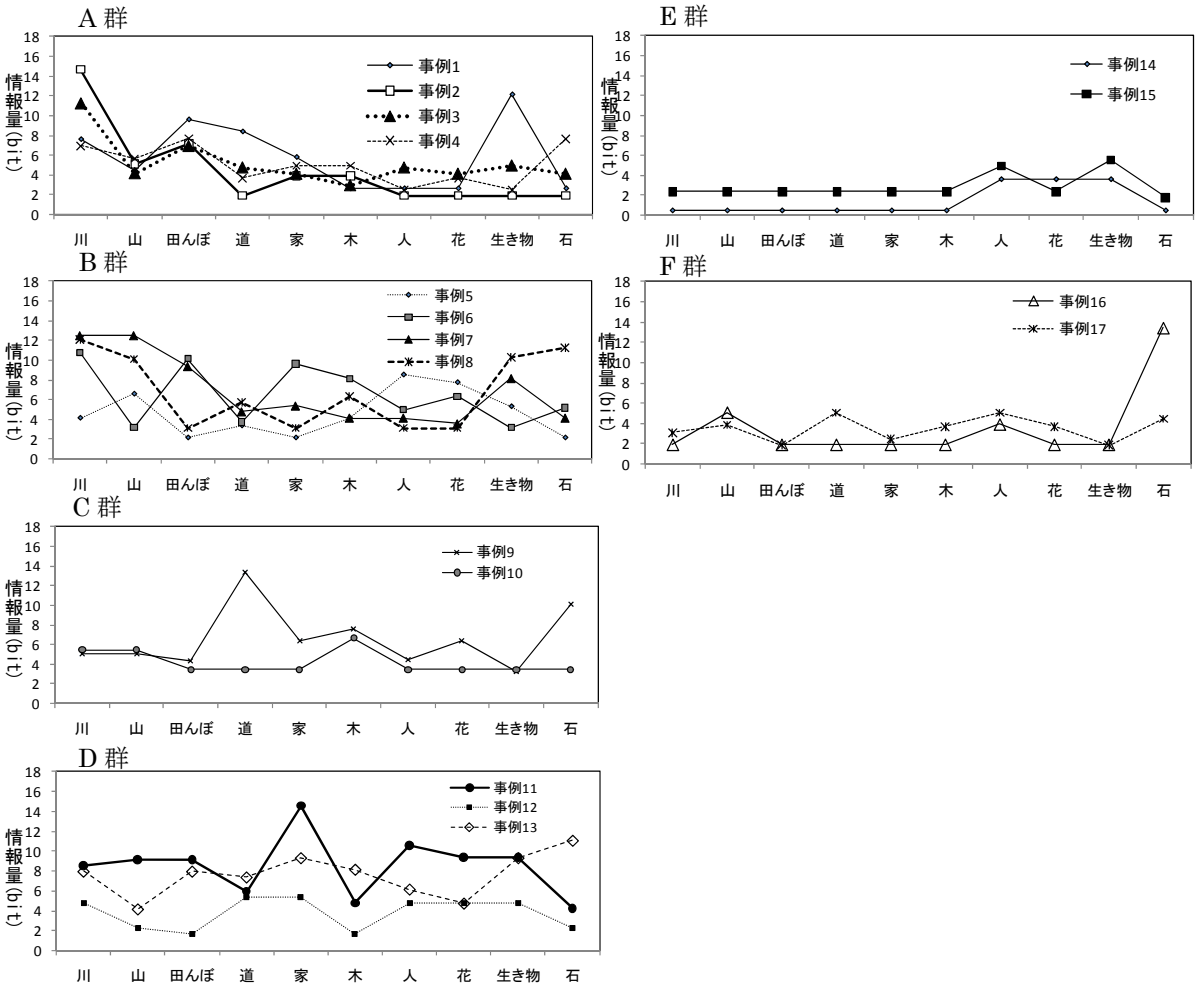

Figure 3 描き手の行動セットの特異性の時系列的変化

考察

見守り手による事例評価と行動セットの対応

各アイテム描画後の描き手の行動を定量的に分析した結果、描き手の行動と、事例の臨床心理学的評価とに対応関係があることが明らかになった。

本研究における見守り手によると、見守り手は各事例を評価する際に各アイテム描画後の描き手の行動の想起を意識しておらず、また本結果で示された各事例の評価と行動の対応関係を知らなかった。また、各アイテム描画後の描き手の行動は、意図的になされるものであり、そこに描き手の内面が反映した可能性がある。描画後の行動には心理的構えがほとんど関わらず嘘がつけないことから、描画後の行動は分析指標としての有効性が高いと考えられる。

また本研究では、ある個人のある行動セットがその個人のものとしてどの程度特異かを包括的に示す指標を用い、その時系列的変化を分析した。この捉え方は、個人の特性を尊重しつつもその個人の変化をつぶさに捉えていると言える。これは臨床家の専門的技法にも共通する。このため、特異性の時系列的変化を分析することの有効性は高いと言える。

本研究で行った指標化により、心理臨床の熟達者が経験により習得している関係性やイメージ賦活という主観的な評価が、客観的に観察可能な「描き手から見守り手への交替区間における描き手の身体動作」と対応していることが示された。これにより、臨床実践で風景構成法が用いられる場面での有効な着眼点が得られたと考えられる。また、臨床家の教育の過程において、風景構成法を用いる際に交替区間の一連の身体動作の変化への着眼を促すことが有効であると考えられる。

特異な行動セットの出現と心的状態

ここでは、各群の描き手がどのような心的状態であったかを考察するために、描画と話し合いの終了後に実施した質問紙調査への回答を踏まえながら検討する。

まず、関係性が成立せずイメージ賦活の程度が低く評価された C 群、D 群について考察する。C、D 群では、描き手の行動セットの特異性の変化はそれぞれの群内で共通しなかった。また、事例によって、描画の進行の途中で突発的に、特異な行動セットが生じることが特徴であった。行動セットの特異性の突発的上昇は、D 群の事例 11 の家を描いた後や、C 群の事例 9 の道を描いた後に観察された。事例 11 の描き手は、質問紙調査への回答の中で、「描いている絵の中に家は存在してほしくないと思った」ことを報告した。また C 群の事例 9 の描き手は、描画後の話し合いで、「本当は道をこう描きたいという気持ちでいたが、残った紙面の都合で描けなかったので、妥協して別なところに描いた」と報告した。これらの報告から描き手に何かしらの当惑があったことが推察される。

さらに、D 群の事例 11 の家を描いた後や、C 群の事例 9 の道を描いた後には、鼻を手で擦る、口元に手を持っていくといった自己接触行動を含む行動セットが観察された。そこで描き手の自己接触行動に着目して A、D 群を分析したところ、これらの行動は A 群の描き手にはほとんど観察されなかったのに対して、D 群では繰り返し観察された(長岡・佐々木・小森・金・石丸、2011)。自己接触行動は話者が当惑しているときや当惑を乗り越えたときに生じやすいことから(菅原, 2010)、A 群の描き手と異なり、D 群の描き手には当惑する場面が多かったことが推察できる。実際、「描画中見守り手の存在が気にならなかったか」という質問に対して自由記述させたところ、D 群のうち回答のあった 2 名ともが「緊張した」「恥ずかしかった」と報告した。これらのことから、C、D 群では、最初だけではなく最後のアイテムに至るまで、描き手に緊張や動揺があり、その当惑や緊張が行動セットに大きく影響していたと考えられる。

一方、関係性が成立しイメージの生き生きとした賦活が感じられたと評価された A 群には、最初の描画アイテムである川で特異性の高い行動セットが生じるが、田んぼの描画以降描き手の行動セットが一貫するようになるという特徴があった。「見守り手の存在が気にならなかったか」という質問に対して、A 群のうち回答があった 4 名のうち 2 名が、「途中から気にならなくなった」と報告し、他 2 名は「気にならなかった」と報告した。これは D 群とは異なる傾向を示している。これらのことから、A 群の描き手は、最初の描画アイテムである川を描画したときには見守り手の存在によって緊張している状態であったとしても、途中から、見守り手がいても緊張せずに描画できる状態に変化したことが推察される。

関係性成立事例における描き手の行動の特徴

つぎに、関係性が成立しイメージの生き生きとした賦活が感じられたと評価された A 群の事例において観察された行動を具体的に、また A 群と対極的な D 群との比較を通して、検討する。さらにこれに基づき、描き手と見守り手の関係性についての考察を行う。

A 群の各事例において繰り返し観察された行動のうち共通するものは、「はい」(或いは「できました」)と言う行動であった。「『はい』と言う」行動は、音声によって、自分の描画完了を見守り手に伝え見守り手に次の教示を求めようとする意図によるものであると推測できる。この行動は A 群の事例 1～4 において、分析個所 10 回中平均 8.8 回観察された。しかし、この行動は D 群では、事例 13 においては分析個所 10 回中 8 回観察されたが、そのほかの事例 12 では 1 回のみ、事例 11 では 1 度も観察されなか

った。

A 群では、このほかに、「両膝に両手を置く（事例 1, 2, 4）」、「上体を起こす(事例1, 3, 4)」行動が、D群とは異なり、高い頻度で観察された。また、A 群の事例 2 では「手のひらを上に向け紙を差し出すしぐさをする」行動も観察された。これらの行動も、描画完了を伝え次は見守り手に順番を譲ろうとする意図によるものと推測できる。

また、A 群の事例では「ペンや手を素早く引っ込める(事例 1, 2)」、「紙から手を離す（事例 3）」といった行動も観察された。これらの行動も、自分が表現する時間は完了したことを明示的に表そうとする意図によると推察される。しかし D 群のいずれの事例においてもこれらの行動は観察されなかった。

このように、A 群の事例では、自分の描画完了を明示的に表し見守り手の次の教示を待っていることを示す行動が、描画が進むに従って確立されていったと考えられる。見守り手からみれば、これらの行動が安定し見られるようになることによって、いつ次のアイテムを教示すればよいかを容易に判断できるようになると推察できる。実際、見守り手は、D 群の事例では、どのタイミングで次のアイテムの教示を出したらいいかわかりにくくて困ったことがあったと報告した。

本研究では関係性成立事例のサンプル数が多くなかったため、今後、関係性成立事例のサンプル数を増やした検討をすることにより、自分の描画完了を明示的に表し見守り手の次の教示を待っていることを示す行動を整理することができるだろう。それに基づき、関係性成立を評価する指標を作成することが可能かもしれない。ただし、自分の描画完了を明示的に表し見守り手の次の教示を待っていることを示すという描き手の意図は同じであっても、それが如何なる行動に表れるかには個人差があるため注意が必要だろう。実際、上記のように、事例2, 3の描き手には、他の事例には観察されないその個人に固有の行動（例えば、事例 2 の、「手のひらを上に向け紙を差し出すしぐさをする」）が観察された。このため、見守り手に順番を譲る意図を表す行動の指標は、単独でなく、行動セットの特異性の指標などと併用するのが好ましいと考えられる。

関係性成立と行動セット収束のプロセス

これまでの検討を踏まえると、A 群の描き手は、最初は緊張したとしても、描画が進むとともに、あまり緊張することなく、見守り手に順番を譲ることを示す明示的なシグナルを送りスムーズに交替しながら描画できる状態になったと推測できる。こうした状態は関係性の成立と密接に関連すると推察できるため、A 群で見られた描画後の行動セットが一貫していくプロセスは、関係性が成立していくプロセスを反映していると考えられる。このことは、A 群ほどではないが関係性の成立とイメージの賦活があったと評価された B 群のうちの事例 7, 8 において、A 群と共通する行動の時系列的変化が見られ、かつ事例 7, 8 において行動セットが一貫していく速さは A 群に比べてゆっくりしていたことによっても、裏付けられる。

一方、C、 D 群での描き手は、終始緊張しており、ときとして自分の描画について描き手が動揺・当惑する状態であったと推測できる。この状態を、C、 D 群における描き手の行動の特異性が描画の中盤に突発的に変化したり終始高かったりする傾向が反映していると考えられる。

E、F 群は、関係性が成立しないままイメージが動いたと評価された事例であった。このような事例は、実際の風景構成法を用いた心理検査においても存在する（皆藤, 1988a）。ただし、この場合のように関係性が成立しない状態でのイメージ賦活は治療的に働きにくいと言われている(例えば、皆藤, 1988a, 1996)。

E、F 群では、描き手の行動が少なく、描画の最初から終わりまで行動がほぼ一貫していて変化しないことが結果から示された。この結果は、描き手の、見守り手の関与の影響を受けず自分の固有の振る舞いを一貫させている性質を反映している可能性がある。また、この性質のため、描き手と見守り手の間の関係性の成立が難しかったことが示唆される。

以上から、描き手が、そばで見守る他者である見守り手の関与を受け入れながら描画できる状態にあるとき、治療的に働くイメージの賦活が生じることが示唆される。そして、風景構成法における描き手と見守り手の関係性が十分に成立している状態とは、描き手が、見守り手の関与を受け入れながら描画できる状態と言うことができよう。

風景構成法は、同じく心理療法場面で用いられるバウムテスト(1 本の木の描画)とは異なり、10 個という比較的多いアイテムを描かせ、アイテム毎に見守り手の教示を挟む。この構造により、描き手と見守り手の関係性を成立させやすい仕組みを備えていると言える。また同時に、関係性成立の様相を見守り手が察知しやすい構造になっているとも言える。

また、風景構成法が治療的意味を持つのは、事前の面接等を通して、クライエントとセラピストとの関係性が成立したとセラピストが感じ、その上でこの技法が施行されたときであることが多い。本研究で見られたような、見守り手の関与があっても描き手の行動が変化しにくい状態や、見守り手の関与ではなく専ら自分の内面的動揺によって行動が変わる状態のときには、風景構成法施行に治療的意味を持たせるまでに、セラピストは別な何らかの対処をする必要があると言えよう。

本研究で扱った事例は、研究を目的として施行した風

景構成法ではあるが、臨床的に 1 つの事例とみなすことができ、この 1 事例の中にもカウンセリング一般に敷衍することのできる要素が含まれていると考えられる。しかし、実際の心理臨床場面で、どのような描き手の行動が見られるか、また、非常に多様で個別性が高い描き手(クライエント)に臨床家がいかに応答しているのか、臨床家の個性はどのように影響するのかといったことについて本研究で議論できているわけではない。今後、研究目的での施行と実際の治療目的での施行によって生じる相違も検討に含めることにより、実際の臨床場面に応用しうる知見が得られると考えている。

謝辞

行動の分析に際し協力いただいた京都大学教育学研究科または学部卒業生の野崎優樹氏、銭龍虎氏、菅野隼人氏、木村大樹氏、鈴木瑠璃氏、松波美里氏に感謝いたします。本研究は科学研究費補助金(佐々木玲仁(23530904)、並びに京都大学こころの未来研究センター研究プロジェクト経費の助成を受けた。

引用文献

Duncan, S., Jr. (1972). Some signals and rules for taking speaking turns in conversations. *Journal of Personality and Social Psychology,* **23**, 283-292.

Duncan, Starkey, Jr. & Fiske, D. W. (1977). *Face-to-face interaction: Research, methods and theory.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Egan, G. (2007). *The skilled helper: a problem-management and opportunity-development approach to helping (7th ed.).* Belmont, CA: Thomson Brooks/Cole.

福山清蔵 (1994). 独習実践カウンセリング・ワークブック 日精研心理臨床センター

Havens, L. (1986). *Making Contact: Uses of Language in Psychotherapy.* Cambridge: Harvard University Press.

皆藤　章 (1988a). 一枚の風景構成法から　山中康裕・斎藤久美子（編）　臨床的知の探究 :河合隼雄教授還暦記念論文集　創元社 pp217-232.

皆藤　章 (1988b). 描画法　山中康裕・山下一夫（編）臨床心理テスト入門　東山書房 pp213-243.

皆藤　章 (1996).　心理療法と風景構成法　山中康裕（編）風景構成法その後の発展　岩崎学術出版 pp45-64.

河合隼雄 (2000). イメージと心理療法　河合隼雄編　心理療法とイメージ　岩波書店　pp1-23.

Kendon, A. (1967). Some functions of gaze direction in social interaction. *Acta Psychologica*, **26**, 22-63.

中井久夫(1984). 風景構成法と私　山中康裕編　H・Nakai 風景構成法 中井久夫著作集別巻 1　岩崎学術出版社 pp261-271.

中井久夫 (1996). 風景構成法　山中康裕（編）　風景構成法その後の発展　岩崎学術出版 pp3-26.

長岡千賀・佐々木玲仁・小森政嗣・金　文子・石丸綾子 (2011). 臨床実践における描画に関する予備的検討 電子情報通信学会技術研究報告, **111**(59), 143-148.

Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology,* **21**, 95-103.

佐々木玲仁 (2005). 風景構成法研究の方法論について 心理臨床学研究, **23**, 33-43.

佐々木玲仁 (2007). 風景構成法に顕れる描き手の内的なテーマ―その機序と読み取りについて―　心理臨床学研究, **25**, 431-443.

佐々木玲仁 (2012). 風景構成法のしくみ –心理臨床の実践知をことばにする–　創元社.

Sawyer, K. (2007). *Group Genius: The Creative Power of Collaboration.* New York: Basic Books

菅原和孝(2010). ことばと身体「言語の手前」の人類学 講談社選書メチエ

Teyber, E., & McClure, F.H. (2011). I*nterpersonal process in therapy an integrative model (6th ed.).* Belmont, CA: Brooks/Cole Cengage Learning.

氏原　寛 (2002). カウンセラーは何をするのか―その能動性と受動性　創元社.

吉田　明 (2004). セラピストはクライエントと"どこで"出会うのか―風景構成法が面接の指針となった事例を通して 心理臨床学研究, **22**, 520-530.

付録

描画後の描き手の行動の一例

・「はい」（或いは「できました」など）と言う
・上体を起こす
・顔をあげる
・笑う
・視線を見守り手に送る
・視線を絵にじっと向ける
・うなずく
・首をかしげる
・手で髪を触る
・手で目の近くにある髪を払う
・手で頬を掻く
・手で鼻を擦る
・手を口元に持っていく
・手頸を回転させてペン先を上に向ける
・ペンや手を素早く引っ込める
・右手を右膝の上に置く
・右肘を右膝について、右手の上にあごをのせる
・両手をクロスさせる
・左足を踏み出す
・踵を上げる

など。全 117 種類。

Client-therapist relationships investigated by quantitatively analyzing: Client's actions during psychotherapy using drawing

Chika NAGAOKA(*Kokoro Research Center, Kyoto University*)
Reiji SASAKI (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)
Masashi KOMORI(*Department of Engineering Informatics, Osaka Electro–Communication University*)
Ayako KIN(*Board of Education, Kanan Town Government*)
Ayako ISHIMARU (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The landscape montage technique is a drawing technique used in psychotherapy. When using this technique, drawing progresses by alternating between the therapist's instructions and the client (drawer's) drawing. When the relationship between the drawer and the therapist becomes well established through this process, the mental image to be drawn becomes more vivid, which is considered to cause desirable psychological changes in the drawer. The process of a developing relationship between the drawer and the therapist was investigated by quantitatively analyzing action of the drawer, which was used as an index of the strength of the relationship. Sessions in which a therapist used this technique (N = 17), each with 17 different participants (drawers) was video-recorded. The therapist also evaluated each session using clinical-psychological parameters. Six independent coders coded all recorded actions made by drawers during the period between finishing a drawing and listening to the therapist's instructions. The variety of actions and temporal changes in the distinctiveness of actions were computed. Results indicated a relationship between the therapist's evaluations using clinical-psychological parameters and the drawer's actions.

Keywords: psychotherapy, drawing technique, action, turn-taking, client-therapist relationship.